

「昭和天皇実録」を読み解く⑦



昭和天皇は生まれた瞬間から、陸海軍の統帥権者としての人生を宿命づけられていた。それでもなお、平和を願いつづけた。国際関係史研究者の山内昌之さん(67)は、その思いの原点は、二十歳の青年皇太子時代、裕仁親王がベルギーの戦場跡に立った瞬間だったと分析する。



国際関係史研究者 山内昌之が語る

引き裂かれた人格、書齋にあったダーウィン、リンカーン、ナポレオンの胸像

ベルギー戦跡から英国王への電報

ふたつの異なる憲法。つまり大日本帝国憲法と日本国憲法のはざま、一方は立憲君主として、もう一方は象徴天皇として生きた方の軌跡。それが「昭和天皇実録」です。私は国際関係史を専門とする歴史学者です。昭和天皇の姿に興味を持ちました。

皇太子時代の昭和10(1921)年3月から6カ月間、英仏伊など欧州各国を訪れました。途中、英領の香港やシンガポール、セイロン、エジプトやジブラルタルなどを經由しながら見聞した旅は、従来の皇太子や歴代天皇にはない経験でした。

日本と共通した立憲君主国である英国に感じた皇太子の親近感、その後の昭和天皇の思想や価値観を決定づけるものになったと思います。

そのひとつが、英国王室と国民の距離の近さでしょう。英国滞在中に、各地を訪問すると出迎えた市民た

ちの人混みで、あふれかえります。

5月10日エドワード英皇太子(のちの英国王エドワード8世、ウィンザー公)とウィンザー市庁舎を訪れた際は、「周囲には市民、郊外より集った民衆、イートン校生徒、市内小学校児童等が密集する」。庁舎内で歓迎式が始まると、「群衆が式場に雪崩れ込み、皇太子・エドワード親王等は、一時まったく群衆の裡に没せられる」。

翌11日も、バッキンガム宮殿を出たエドワード皇太子と裕仁皇太子がロンドン市内を通ると、多くのロンドン市民が、帽子を振り、歓呼して奉迎します。

英国王の教え 終生の根本に

この光景は、敗戦翌年に「人間宣言」をした昭和天皇の姿に重なります。

戦災の復興状況を視察するため、昭和天皇は昭和21(46)年2月の神奈川県を

振り出しに、昭和29(54)年8月の北海道まで、米国の施政権下にあった沖繩を除いて全国を巡幸します。昭和22(47)年には大阪府を訪れます。

6月5日、昭和天皇が大阪府庁を訪れた場面は、昭和天皇が国民統合の象徴になってゆくプロセスで、国民と触れ合う様子を伝えていきます。

昭和天皇が車寄せで下車すると、「約四万人の市民が御身边に押し寄せ御歩行不能の状態に陥られたため、警衛中の米軍第二十五師団のMP(憲兵隊)が空に向けて拳銃を二度発砲し、その間に庁舎内にお入りになる」。なかで昼食をとっていると、1500人の子供たちによる奉迎歌が流れてきます。「食事を中断され再びバルコニーにお出ましの思召しを示されるも」、混乱を憂慮した侍従らに止められます。

昭和天皇の脳裏には、英国での記憶が浮かんでいたのではないのでしょうか。

ノ流血凄惨」ノ語ヲ痛切ニ想起セシメ、予ヲシテ感激・敬虔ノ念、無量ナラシム」英国王の答電からは、皇太子の成長を見守るような温かさが伝わってきます。「殿下ガ此ノ戦場ヲ訪問セラレタルコトヲ欣喜スルモノナリ」

「機関説」に賛成 立憲君主を意識

皇太子が欧州訪問をした大正10年は、第1次大戦の

終結から3年を経た時期です。この大戦は、世界の軍事技術を飛躍させましたが、大日本帝国とその軍部は、その裏側に大量虐殺という影があることを十分に認識していません。英国王は、日本が「平和は無傷で手に入れた」という幻想を抱き続けているのを見抜いていた。それで、皇太子に戦場を見ると伝えたいですね。

昭和天皇は、二十歳あまりで得た経験がずつと、胸に刻んでいました。実録には、昭和54(79)年8月29

日の記者会見で昭和天皇が、「英国国王ジョージ五世から立憲政治のあり方について聞いたことが終生の考えの根本にある」と述べたことが記録されています。

特に、戦場を訪れたことは、大事な教訓になったと思います。戦争とは悲惨なものであり、起こしてはならないとの感想を持ったのは、しごく健全だったといえましょう。この気持ちは、開戦と終戦時にも吐露されています。

一方で、陸軍はこれを面白く思わなかった。「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」。大日本帝国憲法の11条によって、皇太子は生まれた瞬間から、統帥権者になることが宿命づけられていました。陸軍にとって天皇の平和主義は歓迎すべきことではありません。皇太子の考えを知った陸軍は、すこぶる情弱だと不満を持ったのでしよう。こうした感情が、陸軍による昭和天皇への横暴な態度の伏線になってゆく。日本史と世界史が交差したイ

ベルの戦場が端緒となって、昭和天皇の平和への信念と同時に、陸軍の天皇不信という相反するふたつの感情が生まれたのです。

昭和に入ると軍、特に陸軍にないがしろにされ、憤る孤独な天皇の姿を、実録から読み取ることもできます。

昭和11(36)年の2・26事件は、顕著な場面です。関東軍司令官を経て侍従武官長になった本庄繁は、昭和天皇に面従腹背ともいえるべき態度を取り続けます。これには、陸軍全体の性格がよく出ています。同時に真の意味で昭和天皇を輔弼する側近がいかに限られていたか、と感じました。昭和天皇は事件発生当日に、一木喜徳郎枢密院議長に、できるだけそばにいるように、と伝えます。一木はこの日から3月8日まで宮城(皇居)に宿泊します。

一木は、弟子の美濃部達吉とともに天皇機関説を唱えた人物です。昭和天皇は、天皇機関説に対して賛成で

やまうち・まさゆき 1947年生まれ。東大名誉教授。国際関係史研究者。近著に『中東国際関係史研究』(岩波書店)、『歴史とは何か』(PHP文庫)。2006年に紫綬褒章

1946年、吹上・御文庫の書齋で過ごす昭和天皇。飾台の上にリンカーン(上)、ダーウィン(下)の胸像が見える

